

【情報理工学部】令和6年度 学部教学マネジメント報告書

3つのポリシーに基づいた学修者本位の教育の実現に向けて、学部教学マネジメントに関する以下の観点について各学部で計画・実行・検証し、次年度以降の改善に繋げることとする。

1. 学部における教学マネジメントの組織体制の変更点 ※計画書から変更があった場合

変更なし

2. 体系的かつ組織的な教育課程の編成・実施を支える各ツールの改善に向けた今年度の取り組みと取り組みを通して明らかになった課題

今年度の取り組み

①カリキュラムマップ

学部教学マネジメント委員会や教授会等において、カリキュラムマップの見直しとともに主要授業科目、アセスメント科目の設定に関する議論を行った。

②シラバス

2025（令和7）年度から施行する新たな学年暦と授業の実施方法に合わせたシラバスの記載方法を検討した。特に、実験・演習・特別研究科目の単位数と必要な学修時間について整理し、学部内で統一的なシラバス記載を行えるようにした。

③その他（カリキュラムツリー、ナンバリング等）

学部教学マネジメント研修会において、科目ナンバリングに基づくカリキュラムツリーのデザインや体系化に関する議論を進めた。

課題

学部の教学マネジメント方針の教員間での意識共有を進め、各科目レベルまで反映させる取り組みが望まれる。学部全体のカリキュラムツリーにおけるコースごとのカリキュラムツリーの位置づけや表し方について、議論と検討が必要である。

3. 学修成果・教育成果の把握・可視化の今年度の取り組みと取り組みを通して明らかになった課題

今年度の取り組み

学部 FD ワークショップにて、プログラミング演習のカリキュラム改編に伴う現状共有と諸課題の提示・整理を行った。学生の学修における生成 AI の使い方の把握と、望ましい教育方針の有り方についても議論に含めた。

課題

高校における「情報」教科の課程変化にも合わせた望ましいプログラミング教育、情報科学／情報工学教育の有り方については、今後の入学生の動向をしっかりと把握しながら順次軌道修正を図ってゆく必要がある。そのための、学生の知識・技能・態度を把握したり可視化したりする仕組みの開発が課題となる。

4. 授業科目の到達目標の達成状況および学生の資質・能力の修得状況の評価と明らかになった課題

評価（授業科目の到達目標の達成状況 および 学生の資質・能力の修得状況）

カリキュラム改編を行ったプログラミング演習科目の単位合格率はこれまでと同レベルの 90%以上を維持し、各種専門講義科目の合格率も平均的には前年度までと変わらず 70%台を維持した。8 セメスター生の卒業時留年率は 20%を上回り、やや悪化傾向が見える。学習成果実感調査では、授業の到達目標の達成度は「達成できた（80%以上）」「概ね達成できた（60～80%）」の回答が全科目を平均して 90%を超えており、学部の教育目標は大多数の学生において概ね達成されていると言える。

課題

依然として入学後早い段階から低単位に陥る学生や、卒業時に数単位不足で留年となる学生が一定数存在する。また、3 年次秋学期に特別研究履修のためのグレード条件を満たせない学生の層も減少しておらず、勉学習慣や大学での修学態度の停滞を早期からサポートする取り組みが引き続き必要である。学習成果実感調査（回答率平均 40%）など各種修学アンケートへの回答率向上のための取り組みも課題である。

アセスメントプランの取り組み

①結果

科目合格率や留年率などの直接評価に加えて、学年混成チームによる製作・研究の対外発表活動を促進する支援プログラムを実施し、学生の主体性やリーダーシップ・協働力などの資質・能力が高まったという間接評価の結果を得た。

②課題

上記の対外発表支援プログラムを継続し、特に学部生が大学院生と協働する機会の増加によって大学院進学率の向上が見られるかの検証を続ける。入試において「情報」科目を受験して入学する学生の大学での成績動向や、出身高校による「情報」の知識・技能・態度の違いやばらつきを把握する仕組みの検討が今後の課題となる。

※この内容は令和 6 年度以降、本学における教学マネジメントの一環として、本学 HP への掲載を検討します。